



節句人形の

『素朴なギモン』コーナー

Vol. 75

鯉のぼり

今回は童謡「こいのぼり」で

「屋根より高いよ」と歌われる
「鯉のぼり」がテーマです。都

心では屋根より高いものを見か
けることが少なくなりましたが、
ペランダや軒先にはカラフルな
鯉のぼりが掲揚されています。

何匹か掲げられているのを見か
けますが、もともとは大きな鯉
一匹だけ。鯉のぼりに託された
願いや歴史を調べました。

登龍門にちなんだ風習

鯉のぼりは端午の節句に掲揚
される鯉の形を模した吹貫ふきぬきのこ
と。古代中国の故事である登龍
門「鯉が龍門の滝を登り、龍に
転じる」にちなみ、その図を幟
旗に描き、さらに江戸中期に立
体化したものが鯉のぼりである。

日本では子どもの立身出世や健
康を願い、端午の節句に鯉のぼ
りを掲揚するようになった。

1838(天保9)年に刊行
された斎藤月岑げっせん著『東都歳事
記』には次のような記載がある。

「紙にて鯉の形をつくり竹の
先につけて幟と共に立つる事、
是も近世のならばし也。出世の
魚といへる諺により男児を祝す
るの意なるべし。ただし東都の
風俗なりといへり。(紙で鯉の
形を作り竹の先につけて幟と

もに立てることは近頃の習わし。
鯉が龍に出世したという伝説に
ちなんで男児を祝う意味だろう。
ただしこれは江戸だけの風習と
いうこと)」

当時は紙製で、幟の付属から
独立したこと、中国の登龍門が
ルーツであること、江戸で誕生
したことが分かる。

主に紙製だった鯉のぼりが、
明治時代に入ると木綿製が登場
する。戦後、和紙の産地が衰退
したこともあり、木綿製や化学
繊維で多くの鯉のぼりが作られ
るようになった。現在はナイロ
ン、ポリエステル製が主流。紙
製は昭和中期までは盛んに製作
されていたが、現在ではほとん
ど見ることがない。

鯉が増え、色はカラフルに

江戸時代は黒い鯉(真鯉)の
一匹のみが主流だった。歌川広
重『名所江戸百景 水道橋駿河
台』には黒い鯉だけが描かれて
いる。明治以降に赤色の緋鯉も
多く作られるようになり、数匹
の鯉を一緒に掲揚するようにな
る。黒と赤に加え、昭和30年代
には青、緑、橙などのカラフル

な鯉のぼりが登場。五色の鯉の
ぼりがヒットした。時を同じく
して、東京オリンピックを迎え
たため、「東京五輪のために五
色が誕生した」という俗説もあ
ったが無関係。青は清潔、緑は
健康、橙は闘志を表している。

矢車と吹流にも意味がある。
矢車の矢は古来、邪悪なもの
を射るといふことから魔除けの
意味を持つ。江戸から昭和初期
には矢車の上に竹製の籠玉を付
けたが、それが金属製の回転球
に代わった。

吹流は明治以降、鯉のぼりと
一緒に掲げることが多くなった。
五色に染められたものは、古代
中国の陰陽五行説ごうようごうぎょうからきている。
二本線(二引)が染められてい
るものは「子孫繁栄」を願うと
される。



名所江戸百景 水道橋駿河台
(国立国会図書館デジタルコレクション)